

22) 血管造影後の止血に対するひとつの試み

清野 泰之・三浦 恵子 (長岡赤十字病院)
木原 好則 (放射線科)

24人の経大腿動脈血管造影例で止血機構と必要な安静の程度を検討した。止血機構として一次止血の評価には血小板数と出血時間を、二次止血にはプロトロンビン時間と活性部分トロンボプラスチン時間を用いた。止血機構の異常は4人にみられたが、何れも一時止血の異常だった。これに対する圧迫時間の延長は不要であった。止血機構の検査値が不十分なため、今回の調査対象外とした25人の造影例でも同様に圧迫解除をおこない得た。6.5Frまでのカテーテルで二次止血に問題がなければ圧迫帯による固定は2～3時間で十分と考えられた。

第60回新潟消化器病研究会

日 時 平成6年7月23日(土)
午後2時より
場 所 新潟グランドホテル

I. 一 般 演 題

1) 著明な粘液分泌を示した胃癌の1例

曾我津也子・山際 訓
川合 弘一・柳沢 善計 (信楽園病院内科)
村山 久夫 (信楽園病院内科)
谷 達夫・佐藤 攻 (同 外科)
清水 武昭 (同 外科)
森田 俊 (同 病理)
味噌 洋一 (新潟大学第一病理)

症例は65歳女性で、平成6年1月より食欲不振、腹痛、嘔気あり3月に精査入院となった。内視鏡検査で幽門部に粘液附着を認める粘膜下腫瘍様所見を認め幽門狭窄の状態であった。生検では高分化型腺癌で、粘液産生性腺癌の胃への浸潤、迷入腺の癌化などを疑って手術を施行した。切除標本では、腫瘍範囲は9.5×4.0cmで、粘液が分泌する小孔が散在していた。組織学的には豊富な粘液を有する高分化型腺癌で浸潤性発育を示した。

従来報告が見られない著明な粘液産生を示す高分化型ホルマンⅣ型胃癌症例を報告した。

2) 胃内分泌細胞癌の p53 蛋白発現と細胞分化の相関

西倉 健・渡辺 英伸 (新潟大学第一病理)

【目的】胃内分泌細胞癌における p53 蛋白過剰発現の頻度および細胞分化・増殖能との相関につき検討する。
材料と方法: 外科切除された胃内分泌細胞癌13例(ホルマリン固定後パラフィン包埋)。8例に核形態計測を、全例に二重免疫組織化学法を施行。microwave 処理後、一次抗体は p53 (pAb1801)+Chromogranin A (CGA) (SP1) および Ki67 (MIB1)+CGA を組み合わせた。

【結果】1) p53 蛋白過剰発現の頻度は 69.2% (9/13) であった。2) p53 蛋白陽性率と CGA 陽性率との間に有意な負の相関を認めた。p53 蛋白と CGA が同一細胞に発現する頻度は 3.0%以下。3) Ki67 陽性率と CGA 陽性率との間に有意な負の相関を認めた。Ki67 と CGA が同一細胞に発現する頻度は 9.6%以下。4) p53 蛋白陽性パターンと核異型度との間に有意な相関は無かった。

【結論】1) p53 異常は胃内分泌細胞癌発生に大きく関与する。2) 過剰発現された p53 蛋白も細胞機能分化と共に著減する。これは蛋白発現レベルでの変化と推測された。

3) 十二指腸球部に発生した悪性リンパ腫の1例

田代 成元・中沢 俊郎
原田 篤・新井 太 (田代消化器科病院)
伊藤 信市 (内科)
松木 久 (同 外科)

十二指腸に発症した悪性リンパ腫は、消化管の悪性リンパ腫のなかでは、極めて、少数例が報告されているにすぎない。私共は、その稀な1例を経験したので報告する。症例は67才男性で、既往に腎尿路結石で手術、41才から高血圧、60才から糖尿病で加療中、65才に大腸のポリープでポリペクトシーを行っている。平成5年6月7日、糖尿病その他で検査目的で入院。胃内視鏡検査で十二指腸球部に芋虫状の隆起病変あり、生検にて悪性リンパ腫と診断され、球部に限局しており、7月9日、手術 Partial resection of duodenum and haemigastrectomy B II retrocolica を行った。病理組織は non-Hodgkin's lymphoma, diffuse, small cleaved. Sm3, lyo, vo, n (-) aw (-) ow (-) Massforming type 2.5×22cm であった。術後 CHOP 療法を2クール施行した。